

主婦とオルタナティブ労働：二元論的分離の間にある典型的でない労働に注目して

里村，和歌子

<https://doi.org/10.15017/1831393>

出版情報：九州大学，2017，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名 : 里村 和歌子

論 文 名 : 主婦とオルタナティブ労働
—二元論的分離の間にある典型的でない労働に注目して—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

【本研究の問題意識と課題】

女性は近代をめぐって大きく揺れてきた。女性が公的領域に出て「男性並み」の存在になることが社会参加の切符を手にすることだとしたら、私的領域で再生産労働を担うこともまた、近代化を「影で」支える社会参加の切符でもあった。しかし後者の存在を代表する主婦は、女性の解放を目指すフェミニズムにとっては「解消すべき存在」であり、女性は男性と対等な労働者として経済的「自立」を果たすことが目指されてきた(国広 2006: 172)。

しかし、フェミニストたちからの再三の異議申し立てにもかかわらず、実体としての主婦はいなくならない。その理由を探るために、本稿は生産労働／再生産労働、公共領域／家内領域——ジェンダー・イデオロギーによって恣意的に引かれた境界線の間にあるマージナルな領域をグレーゾーンとし、そこで行われる活動をオルタナティブ労働として設定し、主婦たちが経済的「自立」を果たさずグレーゾーンに留まる理由を主観的な利害意識をもとに探った。「労働」という概念を用いるのは、生産労働と再生産労働の間にある活動を、公私領域における労働と同じレベルで照射し検討するためである。

【本研究の構成】

まず第1章では、主婦、労働、家族をテーマに、主婦論、女性労働研究、政治思想研究における公私の領域分離の議論について概観した。性別分業を率先して担う主婦はフェミニズムにとって「解消すべき存在」なのだが、なぜ「解消」されないのかと言えば、先行研究が描く「自立」と、オルタナティブ労働に携わる主婦たちが描く「自立」に違いがあるのではないかという問いを立てた。

第2章から第4章では事例研究として、参与観察とインタビューによりフィールド調査の結果を示した。注目したのは、主婦たちのコストと利益のバランス取りという主観的な意識だ。まずひとつは、自らハンドメイド作品を制作し販売する「作家さん」であり、二つ目はソーシャルビジネスの活動をしている主婦、三つ目はO会という地域活動の事例であった。第2章の「作家さん」の事例では、主婦たちが生産量の限界が来ると生産をストップさせてしまう所以、そして独立して自分の店舗を持たないわけ、さらに第3章のソーシャルビジネスの事例では、担い手の主婦が少ない労働時間と低賃金で満足する理由、第4章のO会という地域活動の事例では、主婦たちにとって私的領域における活動の延長と認識されている地域活動が年長男性による指示という公的領域の色を強めたことによって活動休止に至った理由が、フィールドデータをとおして浮かび上がってきた。すなわちその理由とは、主婦たちなりの「自立」概念が経済的な「自立」ではなく、公私領域の間のほどよい位置にいて、仲間と協働しながら自律的な労働を実現させることにこそあった。

第5章の考察では、公私領域の間にグレーゾーンを設置し、オルタナティブ労働の事例によってなぜその配置の違いがなされるのか、主婦たちがオルタナティブ労働を選ぶ理由について考察した。そこでわかったのは、3つの事例の配置の違いは投じた労働量と利益の質、そして対価という報酬についての主観的なバランスによって維持されること、そして、彼女たちがオルタナティブ労働を選びとる理由は、非自律的であるが安定した賃金が保障された労働形態よりも、自己の裁量は大きい相対的に低い賃金・売上のオルタナティブ労働の優位性を無意識的に嗅ぎ取っているからだとした。意図することなくオルタナティブ労働に携わるということは、主婦たちがプライドや自己承認を満たしながら利己的に利害意識に従いバランスを取った結果である。

以上をとおして主婦たちは決して「自立」を拒絶しているわけではなく、彼女たちなりの「自立」を描き、それを実践しているのだということがわかった。そしてその実践の場所こそが公私領域の間に横たわるグレーゾーンであり、そこでの労働形態こそがオルタナティブ労働である。

私たちが生き、育ち、看取り、死に、また生まれ、育て、育ち、癒され、笑い、休み、という私的領域で織りなされる価値を、その場にいる、資本主義から周縁化された主婦だからこそ勘付いているとも言える。そして実体としての主婦たちは、その価値を大切にすることを合理的だとみなしている。もちろん同時に、その価値を切り捨てないかたちで社会的な協働を叶える公的領域での活動も重視しており、働く、暮らす、その両領域のバランスが取れた状態こそが主婦たちの主観的な「自立」なのだ。

近代資本主義が要求してきた男性標準+主婦という公私関係を変える可能性は、グレーゾーンにおけるオルタナティブ労働をジェンダーニュートラルに膨らませ、その領域分離自体の恣意性を暴くことに見出されるはずだ。